



え・小島サエキチ

努力と信念で 運命を切り開く

人の一生は重荷を負って遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起こらば困窮したるときを思い出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思え。勝つことばかり知りて負くることを知らざれば害その身に至たる。己を責めて人を責めるな。及ばざるは過たるより勝れり——。

この言葉は、徳川家康の遺訓として伝えられています。家康は激動の戦国時代に生きる中で、数々の決断を迫られました。そして、苦勞に苦勞を重ね、念願であった天下の統一を実現したのです。

経営者も一国一城の主です。組織のトップとして会社を守り、社員を守り、家族を守っていく立場にあります。組織の規模は違えども、家康が遺訓に込めたトップの辛苦に、共感できる方も多いのではないのでしょうか。

企業は「変化対応業」です。時代も、お客様のニーズも、日々刻々と変化し続けています。その変化を敏感にキャッチし、戦略・戦術

を立てて、そのつど経営責任者として決断を下さなければ、企業として生き残ることはできません。

製造業に就くN氏は、二十三歳の若さにして、尊敬信賴していた創業者から、企業の生死をかけた大きな新規事業を託されました。

N氏は、創業者の思いを何とか叶えたいと知恵を絞り、試行錯誤を繰り返しました。そして、単身海外へ赴き、技術習得に努め、多額の融資を受けて、最新鋭の機械を導入する決断をしたのです。

しかし、いくら融資を受けて最新の機械を導入しても、取引先に恵まれなければ意味がありません。氏は、大手メーカーや問屋に認められるだけの技術の向上に励みながら、血眼になって全国で営業活動を続けました。その結果、国内トップメーカーとの取引が成立し、現在もなお、斬新な発想で新しい商品開発に努めています。

N氏はこのように語ります。「社員も多額の設備投資に同意し、決断を後押ししてくれました。経営者には、会社の発展のために何

が出来るかを打ち出し、社員と共有しながら実行していく役割がある。今の当社があるのも、あの時にトライしたお陰だと思えます」

N氏は決して運が良かったのではなく、好機に恵まれたわけでもありません。運や好機は誰しも平等に与えられています。それをつかめるかどうかは、個人の経験や体験に裏打ちされた感性（アンテナ）によって変わるのでしよう。困難やプレッシャーにもめげずに目的へと突き進む、強い信念と命がけの努力が天に認められ、N氏は強運と好機を獲得したのです。

「目の前にきたあらゆる機会をとらえて、断乎として善処する人、一度こうと目的を定めたら、終始一貫やってやってみよう、これが世に言う成功者である。(略)運命を切り開くは己である。境遇をつくるも亦自分である。己が一切である。努力がすべてである。やれば出来る」

(丸山敏雄著『万人幸福の葉』)
何事にも動じない固い信念と、成功するまで諦めずに取り組む強い姿勢を貫きたいものです。